



悪魔のわな

悪魔は本物にそっくり似せる

大争闘シリーズ No.3



大争闘シリーズ No. 3

悪魔のわな

悪魔は本物にそっくり似せる

(キリストとサタンの大争闘 32 章)

目次

Contents

| | |
|-------------|----|
| サタンの妨害 | 1 |
| 兄弟を訴える者 | 4 |
| 偽教師たち | 6 |
| 聖書を学ぶ精神 | 9 |
| 科学と啓示 | 12 |
| 真理の偽物 | 15 |
| キリストの神性 | 17 |
| 種々の欺瞞 | 19 |
| 懐疑主義をもたらすもの | 21 |
| 十分な証拠 | 24 |
| 疑いの口実 | 25 |
| 疑惑からの解放 | 27 |
| 主の守りの実例 | 30 |
| 勝利の秘訣 | 32 |

はじめに

「この大欺瞞者が最も恐れていることは、われわれが彼の策略を見破ることである」

サタン(悪魔)は、過去の無知な時代にはその時代にふさわしい方法で人々を欺いてきた。現代文明社会で、サタンはどれほど巧妙に働くだろうか？

キリスト教会に、聖書を信じる者たちにどのような欺瞞が仕掛けられているだろうか？

イエスは警告された：

「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」マタイ 24:24

また、「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる」とも言われた。

サタンの妨害

約 6000 年近くにわたり継続されてきたキリストとサタンの大争闘は、間もなく終結を告げる。そこでサタンは、今までの倍の努力をもって、人類のためにしておられるキリストの働きを妨げ、人々を自分の設けたわなに陥れようとして狂奔しているのである。救い主の仲保のお働きが終わり、もはや罪に対する犠牲が捧げられることがなくなるその時まで、人々を悔い改めさせず、暗黒状態にしておくことが、サタンの目指すところである。



サタンの権力を拒絶しようとする特別の努力が払われず、一般世間と教会とが冷淡で無関心であるとき、サタンは別に気にとめないのである。なぜなら、彼らがその状態にいる限り、

自分の支配から彼らを失う危険がないからである。しかし、人の心が永遠の事柄に向けられ「わたしは、救われるために、何をすべきでしょうか」と魂が叫ぶとき、その場には早くもサタンが来ていて、キリストの力に抵抗して聖霊の感化を妨害し始めるのである。

ある日、神の天使たちが主のみ前に立っているとき、サタンも来てその中にいたと聖書にある。(ヨブ記 1:6 参照)。それは神のみ前にひざまずくためではなく、義人に対する悪意あるたくらみを進めるためであった。これと同じ目的から、人々が神を礼拝するために集まるとき、彼は必ずその中にいる。目にこそ見えないが、この場合サタンは礼拝に列席している者の心を支配しようとして働く。老練な将軍のように、サタンは



前もって計画を立てる。神の使命者たちが聖書を研究しているのを見ると、彼らが人々の前でどのような使命を語るかに注意する。そして、その点について彼が欺いている人々に、その使命を聞かせないように、あらゆる巧妙な策略を用いて、事情を支配しようとする。是非ともその警告を聞く必要がある人々が、何か重要な商用のために出向かなければならないように仕向けたり、あるいは、他の方法で、いのちからいのちに至らせる香りとなるみ言葉に接する機会を妨げるのである。

また、神のしもべたちが人々の霊的暗黒状態に心を悩ましているのを見たり、彼らが冷淡、不注意、怠惰などのかせを打破することができるように、神の恵みと力とを熱心に祈り求めるのを耳にするとき、サタンは熱心さをもりかえして策動する。すなわち、人々に食欲をほしいままにさせたり、または、何らかの点において放縦な生活をさせたり、ひいては彼らの知覚を

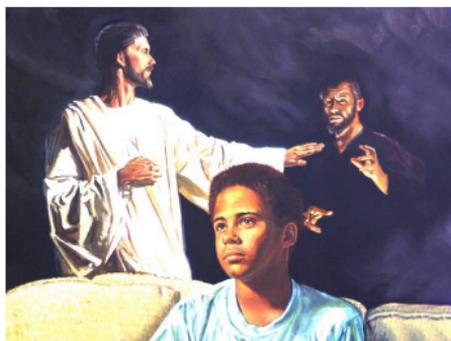
麻痺状態に陥れることによって、彼らが特別に学ばなければならないことを聞かせないようにしてしまうのである。

兄弟を訴える者

サタンは人々が、聖書の研究を怠り、祈りをなおざりにすれば、誰でも彼の攻撃に打ち負かされてしまうことを、よく知っている。そのため、人心を夢中にさせるものを考案し、あらゆる限りの策略をめぐらす。神を信じると言いながら、真理の研究を続けなくて、自分と意見の合わない人々の人格の欠点とか信仰上の誤りとかを指摘することを自分の義務であるかのように思っている人々が、いつもいるものである。こうした人々は、サタンの右腕とも言うべきである。兄弟を訴える者は、決して少数ではない。神が働いておられ、神のしもべたちが真に神を崇めているとき、決まってこの種の訴える者が

活躍する。彼らは、真理を愛しこれに服従している者の言動を、全くそうでないかのように誤り伝え、どんなに熱心でまじめな、自己犠牲的なキリストのしもべたちをも、欺かれた者であるとか、人を欺く者であるとかいうのである。どんなに真実で高貴な行動の動機も、真実を曲げて非難し、信仰経験の浅い人々の心に疑惑の念を引き起こす。彼らは、様々な策略をめぐらして、純潔で正しい者を、不潔で欺瞞的な者であると思わせる。

しかし、誰も彼らによって欺かれる必要はない。彼らが、誰の子らであるか、また誰の模範に従っている



か、誰の働きをしているかはすぐに分かるのである。「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう」(マタイ 7:16)。彼らの行

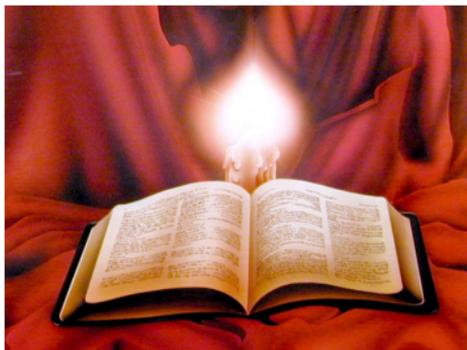
為は、毒舌をもって「兄弟らを訴える者」であるサタンの態度と似ている（黙示録 12:10）。

サタンは人々をわなに落ち込ませるために、あらゆる種類の誤りを伝える部下たちを多く持っている。すなわち、彼が滅ぼそうとして狙っている相手の好みや傾向に適した種々の異端を用意している。サタンは、教会内に不まじめでまだ悔い改めを経験していない分子を入り込ませて、彼らによって不信と疑惑の念を助長させ、神の働きの進展を求め、救いの完成を望んでいる者の邪魔をさせる。また、神とみ言葉に対して純粋な信仰を持たないで、真理のある点にだけ同意して、クリスチャンとして通用している人が多い。こうして彼らは、自分の誤りを聖書の教義であるかのように誤表するのである。

偽教師たち

人が何を信じて、それはさほど重要なこ

とではないという態度は、サタンが最も成功を収めている欺瞞の一つである。人が真理を愛して、受け入れるとき、真理はそれを受け入れた人の魂を清めることをサタンは知っている。そのために、彼は絶えず偽教理、作り話、福音とはいえない福音



をもって真理の代わりにしようとしている。神のしもべたちは、最初から偽りの教師たちと戦ってきた。それは彼らが悪徳の人々であるというだけではなく、魂を危険に陥れる偽りを説く人々であったからである。エリヤ、エレミヤ、パウロなどは、断固としてはばかりとなく、神のみ言葉から人々を遠ざける部類の者たちと戦って来た。これら真理の擁護者たちは、厳格な信仰を軽視する自由主義に賛成しなかった。

聖句についてあいまいな、変わった解釈をしたり、一般キリスト教会において、宗教的信仰に関する種々の矛盾した説があったりすることは、人心を混乱させて真理を見分けられないようにするための大敵サタンの仕業である。キリスト教会内に見られる不和や分裂は、自分の気に入った理論を裏づけるために聖書を曲解するという一般的風習のせいであることが非常に多い。神のみ心を知ろうとして謙遜に注意深く聖書を研究しないで、何か目新しい変わったものを発見しようとする者が多い。

誤った教理や非キリスト教的習慣を支持するために、聖書の前後関係はおかまいなしに一節だけを引き離したり、あるいは、一節の半分だけで自分の主張の証明にしようとするが、残りの半分を見れば、全く反対の意味になることもある。彼らは、自分の肉の欲をほしいままにするために、へびのような狡猾さで、全然無関係の聖句を誤用して、自分の立場を弁護するの

である。このようにして、一方においてはみ言葉を故意に曲解する者があれば、また一方においては想像をたくましくして、聖書の象徴や型について自分の主張に一致するように解釈する者もある。このような人々は、聖書が聖書自らの解釈者であることを無視して、思いのままに解釈を下し、自分たちの憶測を聖書の教えであるかのように説くのである。

聖書を学ぶ精神

聖書の研究は、祈りの精神に満たされ、謙遜かつ喜んで教えを聞く精神で学ばないならば、難解な箇所はもちろん、易しいところでも、その真意を曲解してしまうことが多い。法王教の教師たちは、



この種の難解な聖句を、彼らの目的を果たすための道具に用い、彼ら自身に都合のよい解釈を施して人々に教える。一方彼らは、人々が聖書を研究して、尊い真理を自分で理解する特権を許さない。しかし聖書全体は、書かれているそのまま人々に与えられなければならない。聖書の教えが、このようにはなはだしく曲解されるくらいならば、聖書の教えを全然人々に与えない方がましである。

聖書は、創造主のみ心を知りたいと熱望するすべての者を導くために与えられたものである。神は人々に、確実な預言のみ言葉をお与えになった。天使たちだけでなくキリストご自身さえ、ダニエルやヨハネに速やかに起ころうとする出来事を知らせるために来られた。我々の救いについての重要な事柄は、明らかにされている。それは、決してまじめに真理を求める者を惑わしたり、誤解させるために示されたものではない。この点、預言者ハバククは、神の

言われたことを
次のように記し
た。「この幻を
書き、これを板
の上に明らかに
し、走りなが
らも、これを



読みうるようにせよ」(ハバクク 2:2)。祈りの精神をもって聖書の研究をする者にとって、神の言葉はきわめて明瞭であって、真に誠実な心の持ち主は、必ず真理の光を認めることができる。「光は正しい人のために現れ……る」(詩篇 97:11)。教会員が隠れた宝を捜すように真理を熱心に探求しないならば、どの教会といえども聖潔に進むことはできない。

人類の敵がその目的を達成するために着々と働き続けているのに、人々は「寛大」という叫びによって、サタンの策略に目をくらまされている。サタンが、聖書に代えて人間の思想を

置くことに成功するとき、神の律法は廃され、教会は、自由であることを主張しながら、罪に縛られているのである。

科学と啓示

多くの者にとって、科学の研究はかえってわざわざいとなっている。神は、科学と技術方面の様々な発見によって世界に輝かしい光が注がれるのをお許しになった。しかし、どんなに偉大な知識の持ち主であっても、その研究が神の言葉に導かれないならば、科学と啓示の関係を研究する場合困難を感じるのである。

物質的および霊的な面における人間の知識は、部分的で不完全なものである。彼らの科学的見解がみ言葉の語ることと一致しないのは、ここに原因がある。そして、単なる学説や推測を科学的事実として受け入れる者が多い。このため、神の言葉は「偽りの『知識』」によって

試されなければなら
ないと考える（1テ
モテ 6:20）。創造主
とそのみ業は、彼ら
の理解を超えたもの
である。ところが彼



らはそれを自然の法則によって説明できないた
めに、聖書の歴史は信頼できないと考える。旧
新約聖書の記録の真実性を疑う者は、さらに一
歩進んで、神の存在に疑惑を抱き、無限の力を
自然界に帰してしまうようになる。彼らは、肝
心な錨を切断してしまったため、無信仰という
暗礁にのり上げてしまうより他はないのであ
る。

このようにして信仰から離れ、悪魔に欺かれ
る者が多い。人間は、その創造者よりも賢くな
ろうと努めてきた。人間の哲学は、永遠に啓示
されることのない神秘を探りだして説明しよう
と試みてきた。もし人々が、神がご自身とその

御目的に関して人間にあらわされたことだけを
探り、理解するならば、彼らは主の栄光と威光
と権力を知ると共に、自分たちの小さなことを
認め、自分自身とその子らのために啓示された
ことに満足するであろう。

神が啓示しておられないことや、我々が理解
するように計画しておられないことを、人が
探ったり、推測をたくましくするようにするこ
とは、サタンの欺瞞中の傑作である。ルシファー
が天上の地位を失ったのも、こうしたことから
であった。彼は、神の種々の計画と御目的とが
すべて彼に示されなかったことに不満を抱き、
自分に与えられていた高い地位の職務に関して
示されたことなどは全く顧みなかった。彼はま
た、部下の天使たちにも同一の不満の念を起こ
させて、共に墮落させてしまった。今度は、人
間の心にこれと同じ精神を吹き込んで、神の直
接のご命令を無視させようとするのである。

真理の偽物

聖書の明らかで率直な真理を受け入れたくない者たちは、自らの良心の叫びを鎮静するのに都合のよい作り話を絶えず求めるようになる。さほど霊的でなく、へりくだって自己を犠牲にする必要のないような教理であればあるだけ、一般からの受けはよいのである。彼らは、自分の肉欲を欲しいままにするために、その知的能力を低下させているのである。彼らは自分が知者だと思い上がって、砕けた心をもって聖書を探ることをせず、また神のご指導を仰ぐために熱心に祈ることもしないために、ひとたまりもなくサタンの惑わしに陥るのである。サタンは、彼らの欲求にいつでも応じ、真理の代わりに偽物をつかませる。法王制が人心を支配した秘訣は、実にここにあった。真理には犠牲や苦難の十字架があるからといってこれを拒むこ

とによって、新教徒も同じ道を踏んでいる。世俗と歩調を合わせるために、便宜的な都合主義をとって神のみ言葉の研究をなおざりにする者は、宗教的真理の代わりに、滅びに至る異端を信じるようになる。故意に真理を拒む者は、ついには、あらゆる種類の誤りを受け入れるようになる。ある種の欺瞞は拒んでも、他の欺瞞は簡単に受け入れるのである。使徒パウロは「自分らの救となるべき真理に対する愛を受け入れない種類の人々について次のように言っている。「そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである」(Ⅱテサロニケ 2:10-12)。このような警告は、我々がどのような真理を受け入れるべきかを慎重に吟味する必要があることを語っている。



サタンの働きの中で、最も成功しているものの一つは、欺瞞的な教えをなし偽りの奇跡を行う心霊術（降神術）である。彼は、光の天使の装いをして、人が全く予期していないところに網を張っている。人々が熱心に祈りながら聖書を研究するならば、危険を予知することができ、これらの偽りの教理を信じるようなことはしない。しかし、真理を拒否するとき、彼らは欺瞞^{とりこ}の虜となってしまうのである。

キリストの神性

もう一つの危険な誤りは、キリストの神性を否定する教義である。すなわち、彼はこの世界においでになる前には存在されなかったという主張である。この説は、聖書を信じると表明する多くの者によって迎えられている。しかしこれは、救い主がご自分と天父との関係について、またご自分の神性と先在について、明言さ

れたことと相反するものである。これは、聖書を不当に曲解しなければ受け入れられない説である。これは、贖罪の働きに対する人間の観念を低下させるだけでなく、聖書が神から与えられた啓示であるという信仰を危うくするものである。この思想は極めて危険で、これに対抗することはますます困難になる。人がキリストの神性に関して、靈感によるみ言葉の証言を否認するならば、いくらその点について議論したところで無駄である。なぜならどんな明快な議論も、彼らを説得することはできないからである。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(I コリント 2:14)。このような誤った考えを抱いている者は、キリストのご品性と



その働き、あるいは人類の贖罪という大計画を、真に理解することはできない。

種々の欺瞞

さらにまた、有害で巧妙な誤りは、サタンとは個性を有する者ではなく、聖書に現れている彼の名は、ただ人間の邪悪な思いや欲望をあらわしたものにすぎないという説である。

キリストの再臨とは、人が死ぬときに来られることであると、一般に解説されるのは、彼が天の雲に乗って来られることから人の心をそらす策略である。「見よ、へやの中にいる」とはサタンが長い間言い続けてきたことである（マタイ 24:23-26）。そして多くの者が、こうした欺瞞を受け入れて滅びに陥ったのである。

また、この世の知恵は、祈りは無用であると説く。科学者たちは、祈りは真に答えられるものではないと主張する。それは、自然の法則に反することであって、奇跡である、しかし奇

跡などはないと言うのである。宇宙は一定の法則によって支配されているのであって、神ご自身、そうした法則に反することは何事もなさないと言うのである。このようにして、神はご自分の法則の下に支配されているのであって、その法則を自由にコントロールすることがおできにならないかのように彼らは言う。このような教えは、聖書の証言に反している。キリストとその弟子たちによって、奇跡が行われなかったであろうか。その同じあわれみ深い救い主が、今日も生きておられて、ご在世のころと同様に信仰の祈りに喜んで耳を傾けてくださるのである。自然が超自然と協力するのである。我々が信仰をもって神に祈るとき、奇跡的にこれに答えてくださることは神のみ心であって、祈りのささげられないところに、その答えのないことは言うまでもないことである。

今日、世界各所の教会において容認されている誤った教理や奇怪な考えは、実に数えきれな

いほどである。神のみ言葉によって建てられた道標の一つを動かすことによって生じる有害な結果は、実にはなはだしいものである。真理の一部を捨てるだけにとどまる者は極めてまれであって、大多数の者は、真理の原則を次々に覆していき、ついには事実上無神論者になってしまうのである。

懷疑主義をもたらすもの

俗受けのする神学の誤りが、多くの者を懷疑論者にしてしまう。これらの人々は、そのようなことがなければ、聖書を信じていた人々なのである。人は自分の抱いている正義感、慈悲、博愛の精神などを踏みにじるような教理は、受け入れることができない。しかも、それが聖書の教えであると説かれるために、聖書を神のみ言葉として受け入れようとしないのである。

これこそ、サタンが達成しようとしてねらって

いる目的である。サタンは何よりも、神と神のみ言葉に対する信頼感を失わせようと望んでいる。サタンは懐疑主義者の大軍の首領であって、彼は全力を傾けて人々を欺き、自分の味方に引き込もうとしている。今日、疑うことが非常に流行している。聖書が、その著者であられる神と同じように、人々の罪を責め、人々を罪に定めるので、多くの者は不信の念をもって神のみ言葉を見る。聖書の要求に服従しようとしなない者は、その権威を覆そうと努める。彼らが聖書を読み、講壇から説かれる教えに耳を傾けるのは、聖書や説教の中に欠点を見つけようとするためである。自らを義とするために、あるいは果たすべき義務の怠慢に対して口実を設けたりするために、無神論に陥る者も少なくない。中には高慢と怠慢から懐疑的になる者もいる。彼らは安逸を好むために、価値のある働きを遂行するための努力と自己犠牲を惜しみ、聖書を批評することによって名声を得たいと思うのである。天来の知恵によって光が与えられなければ、

限りある人間には分からないことが多い。そこに彼らは、批評の機会を見いだす。不信と疑惑、無神論の側に立つことが、何か名誉でもあるかのように思っている者が多い。彼らは、いかにも率直を装っているが、実は、自負心、高慢心に駆られて行動しているのである。また、他の人の頭を悩ますような聖句を見いだすことに、興味を感じている者もある。



初めはただの議論好きから、反対の側に立って批評したり理屈を言ったりする者もある。彼らはこのようにして捕獲者の網に引っかかってしまうことを知らない。彼らは、すでに公然と不信を表明した以上、あくまでもその立場を守らねばならないと考える。こうして、彼らは不信仰な者と一致し、自分から天国の門を閉ざしてしまうのである。

十分な証拠

神はみ言葉の中に、それが神からのものであるとの十分な証拠をお与えになった。我々の贖いに



関する大真理は、はっきりと示されている。それは、心から求めるすべての者に約束されている聖霊の助けによって、誰でも自分で理解することができるのである。神は、人類が信仰をおくことのできる確固とした基礎を与えておられるのである。

それにしても、限りある人間の知力は、無限の神の御目的とご計画とを十分に悟ることはできない。我々は、神の深いことを窮め尽くすことはできない。神がご自身の威光をおおっておられる幕を、僭越にも引き上げようとしてはならない。使徒はこう言っている。「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めが

たく、その道は測りがたい」(ローマ 11:33)。我々は、限りない愛とあわれみが無限の力と結合していることを認識できる程度において、神が人間を救われる方法や神の行動の動機について理解することができる。天の父なる神は、すべてのことを知恵と義によって行われるのであるから、我々は、不満に思ったり、不信を抱いたりしないで、うやうやしく服従すべきである。神は、我々が知ってよいことだったら、何でもご自分の目的をあらわされるであろう、それ以上のことは、全能のみ手と、愛に満ちたみ心にお任せしなければならない。

疑いの口実

神は、我々が信じるに足る十分な証拠をお与えになっているが、不信に対する口実を全部取り除かれるわけではない。疑おうと思うならば、その余地はいくらでもある。すべての障害が一

掃され、疑う余地がなくなるまで神のみ言葉を受け入れず服従しないというならば、決して光にくることはできないのである。

神に対する不信は、新生を経験していない者、すなわち神に逆らう人々の間に当然起こる結果である。しかし、信仰は聖霊によって与えられるものであり、それを大切に育てることによってのみ栄えるものである。誰も不断の努力なくして、信仰を強めることはできない。一方、不信は助長すれば深まっていくものである。人々が彼らの信仰を支えるために神がお与えになった証拠に留意せずに、疑惑を抱き、とがめ立てをするならば、彼らの疑惑はますます深まっていくのである。

神の約束を疑い、神の恵みの確証を信じない者は、神のみ名を汚しているのであって、人々をキリストに導くよりも、かえって引き離しているのである。彼らは、広々と黒い枝を広げて、他の植物の上に射す日光をさえぎり、その冷た

い影の中で彼らをしおれさせ枯死させるところの、実を結ばない木のようなものである。このような人々の生涯の働きは、決してやむことのない証を立て続けることであろう。彼らは、疑惑と不信の種をまいている者で、やがてこれらの収穫をしなければならない。

疑惑からの解放

疑惑から解放されることを心から望む者の取るべき道は、一つしかない。分からないことに反問してつぶやくのをやめて、すでに自分たちの上に輝いている光に注意を向けるならば、さらに大きな光に浴することができる。すでに明らかにされた義務をすべて行うがよい。そうすれば、現在疑問に思っていることも理解し、行うことができるようになる。

サタンは、全く真理としか思えないような偽物を示すことによって、真理が要求する克己と

犠牲を好まず、欺瞞に陥ることをいとわない者を欺くのである。ところが、どんな犠牲を払っても真理を知りたいと心から願っている者を、サタンはただの一人も自己の権力下に留めておくことができない。キリストこそは真理であり、「すべての人を照らすまことの光があって、世にきた」と言われている光であられる（ヨハネ 1:9）。真理のみ霊は、人を導きすべての真理に至らせるために遣わされたのである。そして、神のみ子の権威によって次のように宣言されている。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。」「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、……この教が……わかるであろう」（マタイ 7:7、ヨハネ 7:17）。

キリストに従う者たちは、悪魔^{サタン}とその部下たちが彼らに対して企てている策略が何であるか、ほとんど知っていない。しかし、天に座しておられる神は、これらの策略を覆して、ご自分の深遠なご計画を完成される。神は、その

民が火のような試練に会うことをお許しになるが、それは、彼らが悩み苦しむありさまを見て喜ばれるためではなく、この試練を経ることが、彼らの最後の勝利のために必要であるからである。神はご自身の栄光のために、彼らを誘惑から保護することがおできにならない。彼らがどんな悪のそそのかしにも耐えられるようにすることこそ、この試練の目的だからである。

神の民が神に全く服従し、砕けた心をもって罪を告白して捨て去り、信仰によって神の約束を求めて止まないならば、いかなる悪人も悪天使も、神の働きを妨げたり神のご臨在をさえぎったりすることはできない。すべての誘惑、すべての反対と攻撃は、それが公然とくるものであれ、隠れて



くるものであれ、必ず撃退することができる。「これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」と「万軍の主は仰せられる」のである（ゼカリヤ 4:6）。

主の守りの実例

「主の目は義人たちに注がれ、主の耳は彼らの祈にかたむく。……そこで、もしあなたがたが善に熱心であれば、だれが、あなたがたに危害を加えようか」（I ペテロ 3:12,13）。昔、偽預言者バラムが莫大な報酬に目がくらみ、イスラエルに不利な魔術を行い、犠牲を捧げて神の民を呪おうとした時、神のみ霊は、彼の呪いを封じて許さず、バラムは、次のように言わなければならなかった。「神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。」「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終

りのようでありたい。」犠牲が再びささげられたとき、この神を敬わない預言者は宣言した。「祝



福せよとの命をわたしはうけた、すでに神が祝福されたものを、わたしは変えることができない。だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。彼らの神、主が共にいまし、王をたたえる声その中に聞える。」「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いが無い。神がそのなすところを時に応じてヤコブに告げ、イスラエルに示されるからだ。」それでも三たび祭壇が設けられて、バラムはもう一度、呪いを言おうと試みた。しかし神の霊は、預言者の、自らは望まなくちびるを通して、神の選民の繁栄を告げ、その敵の愚かさと悪意を譴責したのである。「あなたを祝福する者は祝福され、あな

たをのろう者はのろわれるであろう」(民数記 23:8,10,20,21,23、24:9)。

この時イスラエル人は、神に対して忠誠を保持していた。彼らが神の律法に服従している限り、地上や黄泉^{よみ}のいかなる力も、彼らに打ち勝つことはできなかった。しかし、バラムは神の民に宣告することが許されなかった呪いを、彼らを罪に誘惑することによって、ついに彼らの上にもたらすことができた。すなわち、イスラエル人が神の戒めを犯し、神から離れるに至ったとき、彼らは、サタンの手中に放置されることになったのである。

勝利の秘訣

サタンは、キリストのうちに住んでいるどんなに弱い魂でさえも、暗黒の軍勢よりはるかに強力であることを知っている。彼は、もし自分が公然とその正体を現したならば、すぐに撃退

されてしまうことをよく知っている。そこで彼は、このような十字架の戦士たちをその強固な要塞からおびき出すと共に、伏兵を設けて、自分の陣地に入ってくる者をすべて滅ぼそうと待ちかまえている。この場合、ただ心を低くして神により頼み、神の戒めにことごとく服従する者だけが安全なのである。

祈りを怠っては、一日、一時間たりとも安全ではない。特に、我々は神のみ言葉を理解する知恵を祈り求めなければなら



ならない。なぜなら、このみ言葉の中に、サタンの策略が示されていて、なおかつ、これを拒絶する有効な方法がこれに示されているからである。サタンは巧みに聖句を引用し、それに自分勝手な解釈を加えて我々をつまづかせようとする。我々は謙遜な態度で聖書を学び、どんな

場合にも神に依存していることを忘れてはならない。こうして、我々は常にサタンの策略に注意すると共に、一方においては常に「わたしたちを試みに会わせないで……下さい」と信仰をもって祈らなければならない。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E.G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com